

# 『愛、アムール』 老いと死に直面した愛の形とは

昨年の第65回カンヌ国際映画祭で最高賞にあたるパルムドールを獲得した仏映画「愛、アムール」(ミヒャエル・ハネケ監督)が公開中だ。満ち足りた生活を送ってきた夫婦が、妻の発病によって「老い」と「死」を見つめるドラマ。今作のパンフレットに寄稿した兵庫県尼崎市の長尾クリニック院長で、日本尊厳死協会副理事長の長尾和宏医師が作品を語った。

「僕のテーマそのものの映画でビックリしました。老老



日本尊厳死協会副理事長

## 長尾和宏医師

介護の現実、終末期医療、親子関係を、芸術性を持って見事に描いている」と力を込める。

「パリで悠々自適な生活を送る老夫婦(ジャン・ルイ・トランティニャン、エマニエル・リヴァ)だったが、妻の発病で状況は一転。妻の意志を汲み、夫は自宅で献身的に支えるが、妻の症状は悪化

フランスでは、終末期に関し、2005年に尊厳死法案(レオネッティ法)が制定されているが、「在宅医療の現場では、パリも、私がクリニックを営む尼崎も同じだと思いました。抱える問題が一緒」

妻の願いで在宅介護をする夫。だが、母の老いを受け入れられない娘は、最高の医療を受けさせたいと考える。次

第に、夫は孤立していく。「最も大事なものは介護者を支援すること。それを改めて感じました。それぞれの立場でできることがあるはず。反面教師となる作品でもある」

必死で水を飲ませるが、嫌がる妻に夫はつい手を上げてしまう。すぐに深い後悔と自責の表情を浮かべる夫の姿に、リアルな介護の現実がにじむ。

その一方で、夫妻の深いつながりを感じた。老老介護という愛の形だと思えます」。

介護の形はさまざま。「食事に外食や自炊があるように、選択肢のひとつになればと思います」

日本尊厳死協会の副理事長。「平穏死」を推奨する身として、結末へ至る過程に思うところがある。現実でも、延命治療を望むほとんどが本人ではなく家族という。「シニア世代だけでなく、その家族である若者にも今作を見てもらいたい。実際に直面する前に、映画で体験してほしい」

## 「シュガー・ラッシュ」プロデューサー クラーク・スペンサー氏

少年のように瞳を輝かせながら、切り出した。「子供の頃、ゲームが大好きでした。パックマン、ディグダグを経て、マリオカートに夢中でした」

次々に、日本のゲームソフト名が飛び出す。彼がプロデュースした新作アニメーションの舞台は、ゲームの世界。「有名なゲームを生み出してきた地、日本の文化を、絶対に、作品に取り入れるべきと。日本へのリスペクトを込めた作品です」

米国で公開週の週末3日間の興行収入4903万ドルとディズニー・アニメ史上最高額を記録したCGアニメーション映画「シュガー・ラッシュ」(リッチ・ムーア監督)が23日、公開される。人気ゲームの悪役である主人公、ラルフが「ヒーローになりたい」と願い、冒険を繰り返す。

作中には「パックマン」のグズタ、「ストリートファイター」のザンギエフなど有名ゲームのキャラクターも出てくる。彼が、それぞれの日本の企業と交渉して実現したものだ。

# あふれる日本への愛

ず、ゲームの世界の裏側を描いていること。ゲームセンター閉店後、キャラクターたちが何を考え、どのような生活をしているかを垣間見られる。「おもちゃたちの日常を描いた『トイ・ストーリー』の世界観に近く、面白いと思った」

そして、強いメッセージ性だ。主人公は30年間、乱暴者の悪役を続け、「自分はこのままでいいのか」と葛藤し、自分のゲームを飛び出す。「冒険の中で彼は自分は自分のままでいい。自分を好きになり、大切にすべきということを学ぶ。今の子供たちに伝えたい大切なメッセージです」

作品には、4つの異なる世界が登場する。①主人公、ラルフが生きる80年代のレトロなアクションゲーム②最新のバーチャルSFシューティングゲーム③仲間外れにされている少女、ヴァネロペと出会うお菓子の国でのレースゲーム④様々なゲームの世界をつなぐターミナル駅。「4本の映画を作るようなハードさでした」と笑う。

メインとなる③のレースゲーム「シュガー・ラッシュ」は、日本生まれという設定。「大好きなマリヤ



映画「シュガー・ラッシュ」の1シーン ©2013 Disney. All Rights Reserved.

くの名作ゲームを生み出してきた、日本へのパクトを込めました」と語るクラーク・スペンサー氏

コース内には、日本の有名なチョコレート菓子やキャンディーが散りばめられている。「沼地に生えた天草に見立てたお菓子は、僕が大好きなもの。ロサンゼルスでジャパンタウンに日本のお菓子を買いに行き、研究しました」

★ レーサーの少女たちの衣装は、彼の提案で「原宿ガール」をテーマに作り上げた。というのもハーバード大時代、89年に日本の自動車会社で研修をした経験がある。そのときに日本文化、原宿ファッションの進化を目的にした。

## デビュー作から23本一挙上映

今年1月15日に80歳で逝去した大島渚監督の追悼特集上映が30日から大阪市西区九条のシネ・ヌーヴォで行われる。昭和34年公開のデビュー作「愛と希望の街」から、遺作となった平成11年「御法度」までをほぼ網羅した23本が上映される。4月26日まで。

常に権力と闘い、問題提起し続けた大島監督は、作

追悼 大島渚氏 大阪で30日から

品に社会性とエンターテインメント性をバランス良く込めていた。

昭和53年には「愛の亡霊」でカンヌ国際映画祭の最優秀監督賞を受賞、日本映画の存在を国内外に発信していた。

特集上映ではデビュー作、遺作、カンヌ国際映画祭受賞作をはじめ、「青春残酷物語」(35年)、「安部闘争を扱った『日本の夜と霧』(同)」「写真、大阪の西成で撮影をした『太陽の墓場』(同)」「白昼の通り魔」(41年)、「絞死刑」(43年)、「少年」(44年)など、若松孝二監督が製作に参加し、性を真正面から描いた「愛のコリーダ」(51年)、「戦場のメリークリスマス」(58年)などが上映される。



© dboo 松竹株式会社

同映画館の支配人、山崎紀子さんは「男性ファンが多い大島監督ですが、女性共感できるものも多い」と話している。